

当連載では、組合員参加の復興支援活動を紹介します。

最終回

「復興商品」を宅配（共同購入）で供給 被災者、宅配事業、組合員が、 一つにつながるボランティア活動



手芸グループ「大船渡中仮設願いのハーモニー」の「ふくろうストラップ」。一つひとつシールを貼る。

いわて生協

2011年11月18日、いわて生協の「共同購入セットセンター」で、被災地に住む人たちが作った「復興商品」にシールを貼るボランティア活動が行なわれた。

被災地では、気持ちが沈みがちな人、大きなストレスを感じている人が少なくない。そんな人たちの中から自主的に生まれた活動が、復興商品作りだ。商品を売って得たお金は、作った人の収入となる。

いわて生協は、これらの商品を各地で行なわれる復興支援イベントで販売してきた。しかし、イベントでは、一つのアイテムにつき、せいぜい10個か20個の販売にとどまっていた。そこで、より多くの人に商品を利用してもらうため、宅配の11月

3週企画で、これらの商品を扱うことを決めた。

だが、バーコードが付いていないこれらの商品を取り扱うには、それに代わる商品番号シールが必要となる。そのシールを貼るボランティアがこの日行なわれ、コープ・ボランティアセンター（CVC）に登録している7人が参加した。

参加者の1人、組合員の高橋江美子^{たかはし えみこ}さんは、以前から手話のボランティアなどを行なっていたが、津波でボランティア仲間の友人を亡くした。

「まだまだ一緒に活動したかったらと思う。その友達を思って、月に数度のペースで、いわて生協が企画する復興支援ボランティアに参

加しています」と話す。また、釜石の実家を津波で無くした、組合員の米澤千枝子^{よねざわ ちえこ}さんは、

「自分が育った家を失い、近所に住んでいた友人も亡くなりました。私にとって震災は人ごとではありません。自分にできることはないかと思い、参加しました」と話していた。

復興商品を作った人の思いに、ボランティアの思いが繋がり、組合員に届く。こうしてつながれた思い、商品は、受け取った組合員の気持ちを温かくすることだろう。そして、その気持ちがまた、新たな復興支援の活動につながっていくに違いない。



商品を作った人、受け取るのことを考えると、思わず笑顔に。写真手前は、米澤さん。



商品は、手作りの小物を中心に、全部で18アイテム。特別チラシを作って注文を取ったところ、計1,397個、82万2,410円の供給を上げることができた。写真は、アイテムの一つ、海産物セット。被災メーカーの商品を、被災された方が詰め合わせた。